

若者の幸福は「逆説」なのか

東京学芸大学 浅野智彦

1 目的

本報告の目的は若者の幸福感を支える要因を検討することだ。はたして彼らの幸福は、いわれているように逆説的な成り立ちのものであるのだろうか。

問題の背景は単純である。若者を取り巻く状況は 1990 年代以降一貫して悪化しているように見える。にもかかわらず若者自身の幸福感（生活満足度）は上昇し続けている（宍戸・佐々木[2011]のようにやや異なった見方をとる論者もいるが）。この「謎」がこの数年人々の関心を集めてきた。

いく人かの論者は、この幸福の成り立ちを逆説的なものとして描き出す。つまり状況が悪化することとは、将来の状況はさらに悪くなるということであり、このことが現在をよりましなものとして肯定的に評価せしめているのである、と。はたしてそのような逆説的な経路は存在するのだろうか。

2 方法

若者の幸福をめぐるこのような「謎」を最も明確に定式化し、それに対して洗練された回答を与えたのは古市憲寿[2011]の議論である。ここでも彼の立論を最初の手がかりとして用いよう。彼の回答はおおむね次の二つの仮説からなる。

(1) (大澤[2011]にほぼ従いつつ) 若者の未来展望の暗さが相対的に現状への満足度を押し上げている。

(2) 友人・仲間関係の重要性が上昇しており、それが現状への満足度を押し上げている。

これらは互いに関連し合っているが基本的には独立した仮説である。本報告ではこの二つの仮説の妥当性を下記の調査データによって検討する。

名称	調査主体	実施年	調査対象	抽出方法	調査方法	回答者数	回収率(%)
1992年調査	青少年研究会	1992年～1993年	東京都杉並区・神戸市灘区・東灘区在住の16歳から29歳の男女	層化2段抽出	郵送	1114	22.1
2002年調査	青少年研究会	2002年	東京都杉並区・神戸市灘区・東灘区在住の16歳から29歳の男女	層化2段抽出	訪問留置	1110	55
2007年調査	青少年研究会	2007年	東京都杉並区在住の16歳から29歳の男女	層化2段抽出	訪問留置	719	40
2010年大学生調査	青少年研究会	2010年	全国の大学生	—	集合調査	2920	—

3 結果

ここでは初期的な分析の結果のみを紹介する。第一に、将来展望の消極性と現在の生活満足度との間にはむしろ負の関係が見出される。将来展望が暗いほど、生活満足度は低い傾向があるということだ。これは上記仮説(1)とは正反対の事態である。第二に、友人関係への満足度と生活満足度との間には正の関係が見出される。これは上記仮説(2)の含意するところと一致している。

4 結論

若者の幸福感の成り立ちは逆説的なものとは考えにくい。すなわち将来展望が暗い場合には現状への満足度も低いとみる方がよさそうである。他方、友人関係に満足している場合には生活満足度も高い傾向がある。しかし 2000 年代後半以降、友人関係について質的な変化の兆しも認められる（内閣府政策統括官[2009]、政木[2013]、村田・政木[2013]）。このことが幸福感にどのような変化をもたらすのか、さらに検討が求められる。

文献

古市憲寿、2011、『絶望の国の幸福な若者たち』、講談社

政木みき、2013、「"楽しい"学校、ネットでつながる友だち」、『放送研究と調査』2013年1月号

村田ひろ子・政木みき、2013、「中高生はなぜ"幸福"なのか」、『放送研究と調査』2013年3月号

内閣府政策統括官、2009、『第8回世界青年意識調査』

大澤真幸、2011、「可能なる革命 第1回 『幸福だ』と答える若者たちの時代」、『at プラス』07号、太田出版

宍戸邦章・佐々木尚之、2011、『日本人の幸福感』、『社会学評論』247号